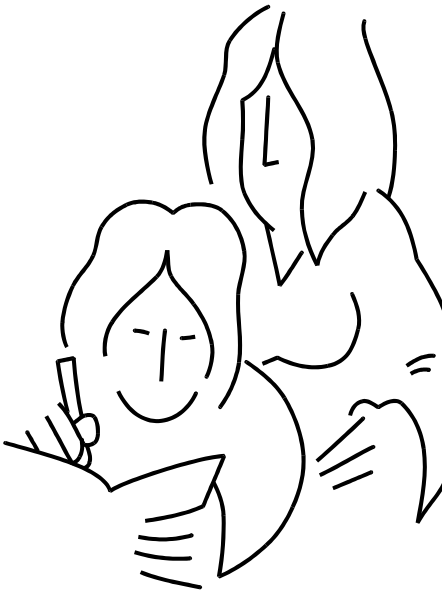
ころばぬ先の杖

松本　康子

ころびそうなよちよち歩きの赤ちゃんに手を貸すことを、「ころばぬ先の杖」とでも言うのでしょうか。この「杖」について考えました。

ころびそうなよちよち歩きの赤ちゃんに手を貸すことを、「ころばぬ先の杖」とでも言いましょうか。この「杖」について考えました。

今年は長期で日本に滞在しています。これを機会に、姪の子ども「ナルちゃん（匠人・生後10ヶ月）」の成長過程をじっくり味合わせてもらっています。そんな私を含め、ナルちゃんのまわりには、時間にゆとりのある元気なお年寄り（曾祖母、祖父、私の妹）が近所に住んでいます。その大人たちを、笑顔ひとつでノック・アウトするナルちゃんは、我が家のスーパー・スターです。サポーターたちに取り囲まれた生後10ヶ月の赤ちゃんを見て、「かわいいという感情だけで育てるわけにはいかない」と、姪のこれからの子育てについていろいろ考えさせられます。



＜隣の芝生＞

このナルちゃんに、1ヶ月おそく生まれたまた従兄弟「結太（ユンタ）くん」がいます。このユンタくんは早産で生まれたため、標準体型のナルちゃんに比べると、体が少し小さめです。ところが、しっかりハイハイしますし、大人のたいていの物を食べることができるというように、運動やそしゃく能力にたけています。

赤ちゃんの1ヶ月という月齢は、大人の1年くらいは違うかもしれません。同じような月齢の子どもの様子などを見て、自分の子どもの成長度の目安にすることは、よくあることです。双子の赤ちゃんを持つ両親が二人を比べることで、早期に重度な病気を発見する場合があるくらいですから、よその子どもとの違いが気になり、つい比べてしまいます。それでなくても生後1年ほどは、日々の成長が著しく、赤ちゃんの両親や新米パパ・ママの両親たちの心の動きも、目まぐるしく変わります。

「ナルちゃん、まだハイハイしないね。それに、そろそろ離乳食を本格的にしないと。」という大人たちの心配が、ユンタくんの様子から現実的になってきました。そこでお年寄りグループは、昔の経験から「知恵」をしぼって、ナルちゃんのハイハイ運動に手を貸します。

そんなことがあってからすぐ翌日、「ナルちゃんがスーパーにハイハイしだしたらしい」と言ってきました。実家の母（曾祖母）の喜びようが、電話を通じて手に取るように分かります。

＜ころばぬ先の杖＞

その1週間後。姪がナルちゃんを自転車に乗せて、実家を訪ねてきました。母が姪を見るなり言った言葉は、「自転車で来るなんて、あぶないよ」です。それでも、ハイハイができるようになったナルちゃんに関心が向けられ、いったん気がそれます。

ナルちゃんは、ハイハイで家の中を自由に探検して、得意の絶頂（実は、ナルちゃんだけでなく、まわりの人間も）です。今までの目線より少し上の方から床を見渡せるようになりました。お年寄りでは見えないような物を拾い歩くという、新しい動きをします。なんでも口に入れては大変ですから、母自らハイハイの後をついて回り、手に取る全ての物をチェックします。

その上、たった1週間見ぬ間に、難易度の高い「つかまり立ち」もするようになっていました。あぶなげな「たっち」をするたび、「上手なたっち」ができるよう、つい手が出てしまいます。ナルちゃんの学習能力は高く、「たっち」すればすぐ支えられることを覚えました。それが、少々無理な体勢のつかまり立ちをしても大丈夫、とばかりの行動を取らせるようになります。ところが、いつも大人の手が間に合うわけではありません。ときには倒れて頭を打ち、泣く羽目になります。「ころぶ」タイミングを計るアンテナがどんどん伸ばされ、大人による介助（杖）が活発化します。その結果、